

盆の傘鉾 3

— 遠州の盆の笠鉾 —

段 上 達 雄

【要 旨】

静岡県には盆行事において笠鉾（笠鉾）が出る行事が分布する。静岡県西南部には「子ども念仏かさんぶく」「遠州大念仏」「和讃」「飛び念仏」などが広がり、県北西部の水窪には念仏踊りが伝承されてきた。これらの盆行事の概要と共にそれぞれの笠鉾の形態と使用方法に、どのような関連性があるのかを述べる。

【キーワード】

笠鉾、子ども念仏かさんぼこ、かさんぶく、大念仏、静岡

1. 遠州のかさんぶく

静岡県周智郡の南部（森町）と袋井市の一部、それに磐田市中部等、太田川流域の田園地帯には笠鉾の下で少年たちが念仏を唱える盆行事が分布する。

塚本五郎は「子ども念仏「笠んぶく」」で次のように述べている⁽¹⁾。

周智郡山梨町方面では「かさんぶく」といい、旧磐田郡岩田村方面では「かさんぼこ」という。共に「笠鉾」のなまったものである。「笠んぶく」は大きな蛇の目のからかさの柄を六尺程度の丈夫なものとし、拡げた笠のまわりに幅三尺ほどの赤い幕をはりめぐらし、柄の上方（笠の内の中央）に細長い四角（直方体）の行燈をつけたものである。

① 森町の子ども念仏

静岡県周智郡森町では、盆行事の一環として8月13日から15、16日に「子ども念仏」が行われる。「カサンボコ（笠ん鉾）」「カサンブク」「盆車」「地藏経」とも呼ばれる行事である。平成8年（1996）には大久保、谷中、中川上、下飯田、中飯田で行われたが、その2年前の平成6年（1994）には大上、赤根円田、北戸綿、南戸綿などの地区でも行われていたという⁽²⁾。平成23年の現地調査では、森町内では、谷中と下飯田、中飯田で子ども念仏が行われているのを確認することができた。

森町の子ども念仏では、13日に菩提寺の山門で「天竺」か「寺和讃」を唱えてから、初盆の家を廻り始める。菩提寺は谷中は雲林寺、下飯田は崇信寺、中飯田は本立寺である。

家々を廻るのは午後3時過ぎから夜中頃までで、最初は地区内の初盆の家々を訪れてから近隣の他地区の初盆の家々を廻る。他地区へ行くことを「セケン（世間）へ出る」という。

子ども念仏の一行は、念仏を唱える子どもたちと、笠鉦、盆車で構成される。

笠鉦は蛇の目の唐傘の柄に竹を結びつけ、その周りに幅3尺ほどの赤い布を幕のように張り巡らせたもので、傘の中に「南無阿弥陀仏」と書いた直方体の行灯を掛ける。

盆車はかつては小型の木製の車だったが、今はリヤカーを用いることが多い。盆車の後には大太鼓、前に小太鼓を据え付ける。中央に小枝が大きく広がった松の木を縛り付け、その枝に絡ませて赤色のほおずき提灯を吊す。なお、森町立民俗資料館に木製の古い盆車が保存展示されている。

最近では父兄が子どもたちを自動車に乗せ、盆車を軽トラックに載せて移動するため、時間があれば、地域外の家も廻るようになってきているという。

戦前、和讃を唱える子どもたちは尋常高等科の2年生以下の男子であったが、現在は小学生男子と女子が参加している。子どもたちの服装は、白のワイシャツにネクタイを締めるが、赤根などは赤のネクタイ、一宮、大久保などは黒のネクタイで、白のトレパンのズボンをはく。そして麦わら帽子を被って白の運動靴を履く。

大将と呼ばれる最年長者は笠鉦を持って先頭に立つ。笠鉦の後を盆車が付き従い、他の子どもたちも付き従う。初盆の家に到着すると、笠鉦を持った大将が「ヒッチャヤレーレー」と唱え、他の子どもたちも「ヒッチャヤレーヤレー」と唱えて、その家の庭に入る。

念仏としての和讃には「寺和讃」「親和讃」「そもそも遠州」「妻和讃」「浜千鳥（子和讃）」「昔日板」「石童丸（刈萱和讃）」「天竺」「箱根山」「観世音」「衆世」などがあり、亡くなった人によって唱える和讃は決まっている。「親和讃」は年配者、「妻和讃」は女性、「浜千鳥」子どもや若い人というのが基本である。「そもそも遠州」は誰に対しても唱えることができるため、他地域で供養する相手がどのような人物か不明な場合は「そもそも遠州」を唱えることになる。唱えるべき和讃が分かると、大将は「気をつけ。礼。それではそもそも遠州」などと命令をかける。大将は音頭出しといって和讃を唱え始め、この時、傘の柄を足元に下ろし、その笠鉦の中に入って霊を招くように和讃に合わせて笠鉦を前後に揺らす。他の子どもたちは笠鉦の横に一直列になって整列し、各自手に持っていた弓張り提灯を前に置いて和讃を唱える。大将だけではなく子どもたち全員が笠鉦の下に入って和讃を唱える地区もある。念仏が終ると、施主（初盆の家の主人）がお布施を差し出す。大将の横にいる子どもがお布施を受け取ることが多い。昔はこの役目の少年は少将と呼ばれ、お布施を入れる鞆を携帯していた。そして来た時と同じように笠鉦を掲げて、盆車を曳きながら「ヒッチャヤレーヤレー」と唱えて去ってゆく。

8月23日と24日の地蔵盆では、森町米倉や袋井市見取のお地蔵さんにカサンボコが集まり、



写真1：谷中のかさんぼこ



写真2：下飯田のかさんぼこ



写真3：中飯田のかさんぼこ



写真4：中飯田の盆車

「アオリッコ」「ナラシアイ」「ナリッコ」をした。盆車を近づけて太鼓を叩きあい、どちらが勢い良く高々と鳴るかを競ったという。

子ども念仏の世話は昔は地区の青年会や青年団が担当していたが、現在は子どもたちの保護者の有志が子供連と称して世話をしている。

敷地のかさんぶく

磐田市旧豊岡村の地域では、盆の期間中の8月13日と14日に遠州大念仏7組と子ども念仏3組が新盆家庭を廻っており、子ども念仏では傘んぼこを立て、太鼓と小太鼓を打ち鳴らす。

磐田市敷地地区では8月13日から14日にかけて「かさんぶく」が行われる。現在、「敷南子ども念仏」と「敷上子ども念仏」の2集団が活動している。地元の伝承では、子ども念仏は明治30年頃に誕生し、遠州各地で盛んに行われるようになったという。戦時中は一時中断したが、戦後復活し、昭和30年（1955）までは中学生たちが実施していたが、再び中断することになった。敷南地区では昭和53年（1978）に地区の有志の人たちが保存会を設立して復活させ、今でも敷南子ども念仏として小学生を中心に活動している。子どもたちの衣裳は、男子は白ワイシャツに白ズボン、青ネクタイを締めて白い運動靴を履く。女子は白衣を着たお遍路さんの姿である。なお、男女ともに菅笠を被る。なお、敷上区子ども念仏では男女ともに白ワイシャツに白ズボン、赤ネクタイを締めて白い運動靴を履き、麦わら帽子を被り、地区によって服装等に特色が出るようになって



写真5：敷南の子ども念仏



写真6：敷上の子も念仏

カサンボコ（笠ん鉢）自体は、蛇の目傘の縁に3尺3寸幅の緋縮緬の幕を巡らせ、持ち歩きやすいように柄に竹を継ぎ足して長くしたもので、傘の柄上部に行灯をとりつけている。行灯の前側には南無阿弥陀仏と書き、左右の側面には蓮の花を描く。

② かさんぼこの分布

この行事は「子ども念仏」「かさんぶく」「かさんぼこ」「盆車」「地藏経」と呼ばれている。塚本五郎は『土のいろ』で「かさんぶく」の多くが第2次世界大戦中に中断したが、山梨や三川方面では昭和35年頃でも盛んに行われていると述べ、大正から昭和初年には「かさんぶく」は80カ所以上あったと推測している。

表1：子供念仏かさんぶくの旧伝承地域

	旧地名	現在地
静岡県磐田郡	敷地村	磐田市豊岡敷地
	野辺村	磐田市豊岡のうち
	広瀬村	磐田市豊岡。上神増附近
	岩田村	磐田市匂坂上付近
	大藤村	磐田市大久保付近
	向笠村	磐田市向笠
	富岡村	磐田市豊田付近
	今井村	袋井市太田のうち
	三川村	袋井市友永のうち
	静岡県周智郡	久努西村
宇刈村		袋井市宇刈
山梨町		袋井市上山梨・下山梨
飯田村		周智郡森町飯田
円田村		周智郡森町円田
一宮村		周智郡森町一宮

(塚本五郎『土のいろ』より作表)

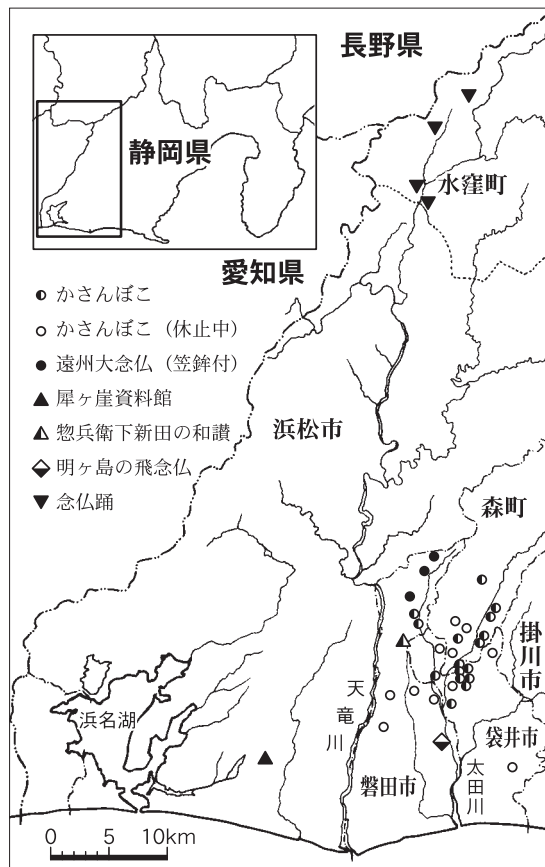


図1：静岡の笠ん鉢分布図

2. かさんぼこの系譜

① 青年たちから子どもたちへ

この「子ども念仏」、通称「かさんぼこ」は昔から子どもたちの行事だったのだろうか。

磐田市北部に位置する敷地地区（旧豊岡村敷地）の「かさんぼこ」は「明治30年代には青年会主体で行っていたといわれる。戦時中を除き、昭和30年代には中学生を中心に行われるようになり、現在は敷南と敷上区の小学校上級生たちによって子ども念仏が行われている⁽³⁾」という。

また、最近まで「和讃」という行事が、旧豊岡村（磐田市北部）の惣兵衛下新田で行われていた。昔は周辺の万瀬・大平・本村・田川・新開・大楽地・合代島・杜山・壱貫地・上神増・惣兵衛下新田でも伝承していた⁽⁴⁾。この「和讃」は子ども念仏の青少年版といってよい行事であった。しかし、平成4年頃には惣兵衛下新田以外では「和讃」を行う集落は既になくなっていったという⁽⁵⁾。

「和讃」は行列を組んで新盆の家を巡訪するが、その行列の先頭をカサンボコ（笠ん鉢）が進んで

いた。その後を松の大きな枝を立てて赤い提灯を吊り下げた盆車が進み、若い衆や子どもたちが付いて行った。新盆の隣家衆2名が和讃の一行を出迎え、和讃のオハオリ（黒羽織着用の年長者）が挨拶を受けて庭入りする。庭に入ると、盆飾りの前にカサンボコ中心に音唱（音頭出し。年長者）とカア（側。若い衆）が並んで和讃を唱える。その後、施主（新盆の戸主）から接待を受け、この間に子どもたちが地蔵経を唱えた。

袋井市宇刈に伝わる、明治18年の「盂蘭盆念仏取締之事」という文書に「盂蘭盆大念仏及子供念仏者更ニ廃すへき旨、毎村申合セヲ定メ、毎戸ノ調印ヲ要スル事」と記されており、当時、宇刈では子どもたちが念仏（和讃）を唱えていたことがわかる⁽⁴⁾。和讃は青年たちと子どもたちが一緒になって唱えて廻っていたのである。

『豊岡村史』に「和讃は若い衆と子どもたちが組となって行われたが、音頭出しが疲れて和讃を休む日には、子どもたちだけで地蔵経を唱えて隣村にでかけた。したがって、地蔵経は本来は和讃の演目のひとつであったが、独立して唱えることもできたのだ。そこで、若い衆が和讃をやめて大念仏だけを申すようになると、独立して単独で供養に回るようになった。これが現在に残る子ども念仏である」と記されている。

以上のことから、「子ども念仏かささんぼこ」は、本来は「若い衆」たちと子ども組のような年齢階梯集団による盂蘭盆会の新仏の供養行事「和讃」であったが、それを子どもたちが引き継いだものだと考えられるのである。

② 遠州大念仏

遠州大念仏は静岡県浜松市を中心に分布する盂蘭盆の民俗行事で、初盆の家から依頼されて、その家の庭で大念仏（念仏踊り）を演じる。大念仏は三方ヶ原と犀ヶ崖の戦いで戦死した人たちを弔うために始まったと伝えている。江戸時代には約280の村々で大念仏が行われていたとい、今でも約70組が遠州大念仏保存会に所属して活動している。この大念仏は江戸期に度々禁令が出され、明治期になっても禁止されたため、一旦衰微したが、昭和5年（1930）に浜松で「遠州大念仏団」が結成されると、周辺地域でも大念仏が次第に復活し、組織化が進み、現在は名称を変えて「遠州大念仏保存会」として活動している。

旧豊岡村（現磐田市豊岡地区）では万瀬・大平・大楽地・合代島・壱貫地・上神増・三家・松之木島の各地区で大念仏が伝承され、かつては虫生と社山の集落でも行われていたが、現在（平成25年当時）は実施されていない。カサンボコ（笠ん鉢）は万瀬・大平・大楽地の大念仏で今でも用いられ、虫生でも使用されていた。この地域は遠州大念仏の分布の北端でもある。その他の地域では、島田市金谷地区大代の大念仏でも笠ん鉢が用いられていたが、後継者不足が原因で平成11年を最後に大念仏は休止してしまった。ここは大井川添いの地で、遠州大念仏の分布の東限にあたる。笠ん鉢が登場する遠州大念仏は数少ない。この中で大平組の大念仏を見ることができた。

大平の遠州大念仏

大念仏の一行は必ず訪問する施主の家の手前で隊列を組む。行列の前に行くのは、施主の依頼を受けて家まで案内するヒキテ（引手）と呼ばれる人で、弓張り提灯を持つ。行列の先頭はカシラサキ（頭先）と呼ばれる統率責任者2名で、三葉葵の紋付羽織姿で提灯を下げて行列を先導する。次にヒンドウロウとも呼ばれるカシラ（頭）2名が続く。頭は十字に組んだ棒先に下げた燈籠を持ち、首から「回向」と書いた頭陀袋を下げている。続いてノボリ（幟）といって「無形民俗文化財 遠州大念仏保存会」と書いた幟を持つ人が1名、その後ろを笠ん鉢が進む。大きな鉦を

棒に吊って二人掛かりで担ぐ双盤が2組、太鼓と
いって桶胴締太鼓を持った者6名、笛（6穴の
横笛）6名、スリガネ（摺鉦）という小型の鉦を
持つ者1名、道化役2名、トモマワリ（供回り）
といて音頭取り（歌い手を含む）数名が組名を
書いた提灯を持つ。最後はオシ（押し）と呼ばれる
行列の秩序を守る世話役2名が紋付羽織姿で提灯
を持っている。

行列の先頭が、「庭入り」といって施主の家の
オオド（庭）に入ると、まず「四方差し」を行う。
ヒンドウロウを持つ頭2名が、まず、仏壇のある
座敷に向かって並んで礼をした後、庭に対角線
を描くようにヒンドウロウを交差させ、四方に向
かって拝礼する。オオドの地と死者の霊を鎮める
ためであるという⁽²⁾。四方差が終わると、幟と笠
鉦を高く掲げ、大念仏の行列がオオドに入場
する。前列に桶太鼓、その両脇に双盤、後列に音
頭取りと念仏衆が並び、その近くに笠鉦を立て
る。音頭取りの念仏やウタマクラ（歌枕）にあわ
せて唱和する。そして太鼓キリといって太鼓を
叩きながら勇ましく踊る。この時唱えられる念
仏は「差し念仏」「歌枕」「引き念仏」「願以
此功德」で一曲となる。「歌枕」は子ども笠
鉦で唱えられる和讃と同様のもので、新仏の
性別年齢などによって、「高き山」「親様」「妻」
などを唱え分けている。大念仏で太鼓をキッ
て踊っている最中、道化役が周辺でおどけた
所作をする。1人は丁髷の鬘を被り、ロイド
眼鏡にちよび髭をつけた扮装をしており、も
う一人は赤い着物を着ておかめの面をつけた
女装で日の丸の扇を持つ。

他の遠州大念仏と同様に大平組は地区内の古
老から記憶を頼りに指導を受けて大念仏を復
活したという。大平組の大念仏の特徴は「歌
念仏」といわれたことと「四方差し」がある
ことである。「歌念仏」と呼ばれた理由は、
最後に弘法大師の詞章を唱えるためである。
また、「四方差し」は他の大念仏の組にはな
い所作である。水窪町の大念仏では弓燈籠
を用いた「五方差し」という所作があり、
旧豊岡村の遠州大念仏の「四方差し」はこ
の水窪の「五方差し」の影響を受けたものと
考えられている⁽⁶⁾。

③ 飛び念仏

静岡県平野部の念仏行事の中で、笠鉦が用
いられているのは主に「子ども念仏（カサ
ンボコ）」と遠州大念仏の一部であるが、
それに太田川流域（磐田市と袋井市の接す
る地域）に伝えられている「飛び念仏」を
付け加えることができる。飛び念仏の由来
は次のようなもので、遠州大念仏とは違
っている。源平合戦の翌年、太田川流域
の村々の水田は蝗の発生によって大きな
被害をこうむったが、これは平家の怨霊
によるものと恐れられた。また、三尸虫
（庚申講で天帝にその人の悪事を伝える
という）や疍の虫なども、病をもたらす
元凶と考えられており、それらを念仏の
功德で鎮めようとしたのが始まりである
と伝えている⁽²⁾。このことから、御霊
信仰を基盤に虫除けを行い、五穀豊穰と
無病息災を祈る行事であることがわか
る。

磐田市明ヶ島の飛び念仏では、小学校
の男子上級生が華やかな着物を着て鉢
巻きを締め、赤い手甲に草履を履き、
笛や念仏唄にあわせて、締め太鼓を
たたきながら踊る。踊りの途中に飛ぶ
ことから、飛び念仏の名称が生まれた
という。

また、ガエロッチョと呼ばれる行事が
袋井市友永にあり、カサンボコに似た
盆車と笠鉦が出るという⁽⁷⁾。



写真7：遠州大念仏大平組

3. 水窪町の念仏踊り

天竜川左岸中流域の平野部に「かさんぼこ」が分布するが、その北方約40km離れた天竜川の上流、浜松市天竜区水窪町でも笠鉦を出す盆行事が分布する。ここでは盂蘭盆会の迎え盆と送り盆（精霊送り）の時に大念仏が行われるが、盆前のお施餓鬼踊りや虫送り供養、それに6月の祇園でも大念仏を行っており、この時に大傘などと呼ばれる笠鉦が出される。

平成25年に調査に行った時には、神原の虫送り念仏を調査することが出来た。しかし、西浦の施餓鬼の念仏踊りは過疎化によって平成20年頃に休止となり、平成25年に行った時には復活を模索している状況だったが、幸いなことに西浦中組の笠鉦とそれに吊る燈籠を見せてもらうことができた。

表2：浜松市天竜区水窪町の念仏踊り

地区名	開催日	行事名	傘鉦等の特記事項
西浦 (にしうれ)	8月8日	お施餓鬼踊(大念仏)	愛宕燈籠(上組の大傘)、阿弥陀燈籠(下組の大傘)
	8月14日	迎え盆(新盆踊)	
	8月16日	送り盆(精霊送り)	新盆燈籠(番傘下に六角燈籠)
神原	8月10日	虫送り念仏	虫送り燈籠(傘鉦)2本。八幡社→永福寺
	8月16日	送り念仏	(水窪町中心地)
小畑	8月16日	送り念仏	附属寺
竜戸	8月16日	送り盆	竜戸と河内合同
長尾	8月16日	送り盆	長尾公民館
大野	8月14日	迎え盆	
	8月16日	送り盆	
草木	6月14日	祇園(津島さま)	
	8月6日	お施餓鬼踊	阿弥陀提灯(下草木・大傘)8月7・15日手踊
	8月14日	迎え盆	
	8月16日	送り盆	
向市場	8月14日	虫送り供養	ダイガサ(大傘=傘鉦)2本
	8月16日	送り盆	新盆燈籠を送る
上村	8月15日	虫送り念仏	
	8月16日	送り盆	
向島	8月16日	送り盆	
有本	8月14日	祇園(津島神社)	
	8月14~15日	太鼓踊	
	8月16日		
根	旧6月14日	祇園(八坂神社)	
	7月14~16日		
	8月14日		

※門田も盆3日間に手踊りと送り盆の念仏踊りで傘鉦2基が出ていたが、過疎のために実施されていない。

神原の念仏踊り（虫送り念仏）

浜松市水窪地区神原（旧水窪町神原）では、盆行事として、8月1日の道作りと墓地掃除、5日の七夕の笹採り、7日の七夕、そして8日には早朝に七夕の笹と飾りを八幡社南側の沢の端に納める。10日は虫送り念仏での念仏踊り、14日は早朝の墓参り、町内の親戚の初盆宅への盆見舞いと縁の深い家の墓に参拝するツブラ参り、茄子の馬作りがあり、15日は間日（まび）といって何もせず、16日早朝には仏参りといって永福寺（曹洞宗）の墓地や親戚の墓に参り、午後には各組ごとに新盆宅でお念仏（読経と御詠歌）をして、夕刻に提灯送りをする。

8月10日午後2時から永福寺で「施餓鬼法要」が行われ、午後5時から「虫送り念仏」が行われる。保存会の年配者たちが薬師堂の外陣に外に向かって座り、若連の青年たちが太鼓四つを堂前に一列に並べ、笛を吹いて双盤と太鼓を叩いて「デンデンデン」という踊りを踊る。次に薬師堂の前庭でトウロウサン（灯籠指）が弓燈籠を持って五方を拝する。その間、薬師堂外陣の保存会の人たちは般若心経を読んで薬師の真言を12回唱える。燈籠指は保存会の最長老がなる。弓燈籠とは2本の弓を十字に結んで1本の弓の先に燈籠を吊り下げたものである。次に虫送り念仏を唱える。太鼓が縁打ちになった時に念仏を称え、「エーンボ」の一句で念仏を中断したら、再び太鼓を力強く叩く。この繰り返しで念仏を唱える。薬師堂と八幡様の間の広場で「練り込み」という道行きの開始を告げる踊りを若連たちが踊る。笛とともに太鼓6人と2人持ちの双盤を叩きながら時計回りに3廻る。それから行列が永福寺に向かって出発する。行列は保存会長を先頭に、弓燈籠、南無阿弥陀仏の燈籠2基、保存会員、太鼓、双盤、笛と続き、道中樂を奏でながら進む。保存会も若連も浴衣に草履履きで、若連の人たちは赤い造花をつけた編み笠を被る。燈籠指だけは黒羽織を着る。南無阿弥陀仏の燈籠は虫送り燈籠ともいい、唐傘の柄に竹竿を取りつけ、笠の周囲に垂れ幕を巡らせて燈籠を吊り下げた笠鉾である。この虫送り燈籠には



写真8：神原の虫送り念仏の大傘と弓燈籠

虫送り念仏の時にだけ用いられ、「虫送り」と墨書した短冊を吊り下げる。神原地区の大通りに出ると、「道中ネリ」という軽快な奏楽となり、足休島の行者塚下で五方拝と念仏が行われる。道行きの行列が通り過ぎる時、各戸では家の前で迎え火を焚く。大通りから永福寺に入る門前でも五方拝と念仏が行われる。午後7時頃に永福寺に到着すると、本堂前で五方拝が行われる。同時に本堂北側の広場で若連たちが練り込みを踊る。本堂前の回廊に保存会の人たちが一列に座り、これに直面するように本堂前に太鼓6台を据え、右手に双盤後に笛、左手に3本の燈籠を立て、最初に「寺念仏」を唱える。寺念仏を終えると保存会の人たちは立ち上がって、太鼓の縁打ちに合わせて「寺褒め」の詞章を詠い上げて念仏を終え、その後、本堂で直会となる。

4. 遠州の盆の笠鉾

憑霊する笠鉾

この「遠州大念仏」や「子どもかさぼこ」などに用いられる笠鉾（笠鉾）はどのような意味を持つのだろうか。『静岡県史』⁽²⁾には「笠鉾は、この中に霊を集めるための和讃の重要な呪具

である。和讃はこの笠鉦を象徴とするためにカサブクとかカサボコと呼ばれている」と記されている。どのような根拠があるのかは明らかではないが、笠鉦を依代と見ていることは間違いない。

水窪町の大念仏などの大傘なども新仏などの靈魂の依り憑く道具であると思われる。これらの子ども念仏や遠州大念仏の笠鉦、それに水窪町の盆行事の大傘などの柄に燈籠や四角い行灯型の燈籠が装着されたり、六角形の燈籠が下げられていることは注目したい。

傘自体は外部から憑依するための道具とすると、燈籠は靈魂の容器と考えても良いのではないか。燈籠が傘内の照明用という単純な用途のために付けられているとは考えにくいのである。この燈籠は、傘と組み合わされて愛宕燈籠とか、阿弥陀燈籠、虫送り燈籠と呼ばれるように、神仏や靈魂の容器ではないだろうか。

なお、水窪町の盆行事では、弓提灯は五方拝に用いられ、笠鉦よりも行列の先を進む。日本では弓は魔除けの呪術的な力を持つと考えられてきた。弓提灯を用いて、東西南北と中央の五方を鎮め、行列の先頭で進路の穢れを祓って清めてゆくのである。

遠州大念仏と笠鉦

寛政11年(1798)の『遠江国風土記伝』⁽⁹⁾巻第二の「犀崖」の項に次のような記載がある。「古老曰昔時なかめふり風けはしき時、佐伊といふ獸出、其処^{みぞ}陥となる。故佐伊加計といふ。按元龜三年十二月三方原御陣之時、甲斐軍陥没于茲、仍之溝漸埋、而後七月中旬亡魂^{ついで}發哀音、于時郡中^{いなむし}螟傷稼、流言曰、亡魂之祟也、宗円師者住陷之上常念仏、村民就合唱、囃之謂宗円佐阿、自為拍子、去回向村中之亡魂、近世挑燈籠指天蓋、揚旄表村号、持^{つかさ}筥棒為隊伍、鴨(鳴か?)鉦鼓、夜行於他郡、^{ややもすれば}動為怨惡、村老雖制之乘氣則不止、自然達官省、天明八年有官省政、(御代官大草正之)而念仏夜行之輩國中停止、静謐矣、無螟」[古老の話によれば、昔、長雨が降り風が強く吹いた時、サイという獸が現れて、そこが溝(谷)になった。そのためサイカケという。元龜3年(1572)、徳川家康が三方原の戦いの時、甲斐軍(武田軍)の兵士たちがここに落ちて亡くなり、谷が埋まるほどであった。その後、七月中旬に亡者たちの哀しい声が聞こえるようになった。その頃、郡内では稲の害虫が発生した。流言によれば、亡魂の祟りであるという。宗円という僧侶が崖上に住み、念仏を常としており、村人たちも一緒に念仏を唱えていた。囃(嘶か?)に宗円は阿弥陀をたすけ、自ら拍子をなし、村中之亡霊の回向して去ると謂う。近頃、燈籠をかかげて天蓋をさし、村の名を書いた旗をあげ、筥棒を持って隊伍をなし、鉦鼓を鳴らし、夜、他郡に行く。ややもすれば怨みや悪事が生じた。村老がこれを静止するけれども、やめることはなかった。いつのまにか、お上の知るところとなり、天明8年(1788に)御代官大草正之からのお達しがあった。そして遠江国では念仏夜行が禁止されたために沈静化し、稲の害虫もいなくなった。(意識)]

「犀崖」とは浜松市中区鹿谷町犀ヶ崖のことで、ここには遠州大念仏保存会の本部がある犀ヶ崖資料館が所在する。この資料館はもとは宗円堂という三方原の合戦での戦死者を祀る御堂であった。合戦での戦死者の亡霊の祟りによって稲の害虫が生じたと伝えられていたことは、怨霊が稲の害虫になったと考えられていたことを示し、遠州大念仏の起源が怨霊鎮魂を目的とし、怨霊鎮魂から新仏の供養へと広がっていったことを物語っていると思われる。この考え方は水窪の「虫送り」行事にも通じるものであろう。また、注目されるのは「燈籠をかかげて天蓋をさし」という部分で、この念仏行事に燈籠と天蓋、すなわち笠鉦が付随していたことである。現在の「遠州大念仏」の多くは笠鉦を用いないが、近世中頃の遠州の初盆供養行事には笠鉦が付き添っていたようである。遠州大念仏の分布の北端の磐田市豊岡地区と東端の島田市金谷地区大代などの周縁部に笠鉦が残存していることから、近世において大念仏には笠鉦が伴っていた可能性は高いと思われる。

周辺の笠鉾行事

静岡県に隣接する愛知県東栄町足込の念仏踊りも笠鉾の出る行事である。8月15日と16日に念仏踊りが行われ、「傘ボコ（傘ブク）」と「まわり燈籠」が用いられる。傘ボコは黒縁の赤い傘に「南無阿弥陀仏」と書かれた赤い幕を巡らせている。傘下には新盆の家の数の赤いほおずき提灯を吊り下げる。「まわり燈籠」は山型に白く飾られた竿の両端に「南無阿弥陀仏」と書いた長い紙を垂らし、切り子燈籠を吊ったものである。そして傘ボコの下に蹲踞して大念仏を唱えるという⁽¹⁰⁾。ここは浜松市水窪地区から20kmほどしか離れていない。水窪の念仏と何らかの関連性があると考えられる。

5. 笠鉾行事の事例

【事例1】 横井のかさんぼこ

静岡県袋井市今井地区横井では、8月13日から15日にかけて子どもたちが初盆の家を「かさんぼこ」を持って廻り、その家の前庭で「かさんぼこ」の中に4～5人の子どもたちが立って「念仏（和讃ともいう）」を唱えて新仏を供養する。和讃には「大念仏和讃」「箱根山」「親和讃」「子和讃」がある。リヤカーに太鼓を乗せて運ぶ。初日、初盆の家々を回る前に井塚尊にお参りする。なお、井塚尊とは、この地域を灌漑する水路を開鑿した名主大場九左衛門の功德碑のことである。

かさんぼこは直径約1.4mの番傘の柄に竹竿を縛り付け、約2mほどの高さにして、傘の縁に赤い幕（約75cm幅の木綿布）を紐で傘骨の先に結びつけて吊したものである。

【事例2】 上山梨の笠んぶくと地蔵盆

袋井市上山梨（旧山梨町）地域では、お盆の8月15日の朝から「子ども念仏笠んぶく」といって、初盆家庭を和讃などを唱えて廻る。参加するのは小学校4年生から6年生までの上級生で、1、2ヵ月前からそれぞれの地区の公会堂に集まって、地区の長老や先輩たちから念仏を教わる。盆の期間中、子どもたちは上山梨地区の初盆の家を廻り、家の前で整列して、笠んぶくの中に2人入り、念仏（和讃）を唱えて新仏を供養する。これを門念仏という。子どもたちの念仏が終わると、初盆の家では笠んぶくの中の子どもに御礼としてお布施を渡す。16日にそのお布施を子どもたちで分配する。これを楽しみに、子どもたちは猛暑の中を3日間念仏を唱えて廻るのである。

盆が過ぎてしばらく経った8月23日、上山梨の林光寺延命身代地蔵尊では夕刻から地蔵盆が行われる。この日は地域の子ども会が地蔵尊に念仏を唱えるために、7組の子ども連（子ども会）が笠んぶくとリヤカーで作った盆車をそれぞれ従えて集まる。上町子ども連・中町子ども連・下町子ども連（下手）・金屋敷子ども連・入古子ども連・春岡子ども連（平台）・月見町子ども連などである。そして、各子ども連が本堂前で念仏を唱えた後、林光寺北側を流れる太田川に沢山の燈籠を流す。

笠んぶくは大きな蛇の目の唐傘の柄を6尺ほどの竹に差し込んで、傘の縁に幅3尺ほどの赤い幕を張り巡らせ、柄の上部に細長い四角い行灯をつけたものである。

【事例3】 見取のかさんぼこ

袋井市の三川地域とは市北端の山田・萱間・見取・大谷・友永・川会の6地区の総称である。戦前には三川6地区すべてで「かさんぼこ」を行っていたが、現在は見取地区だけが伝承している。この地域でも子ども念仏のことを「かさんぼこ」と呼ぶ。見取地区では最初に地区の忠霊塔

の前で念仏を唱えてから町内の初盆家庭を念仏を唱えて廻る。盆車に積んだ太鼓を叩きながら、新盆の家々を廻って念仏を唱える。念仏和讃には「親和讃」「妻和讃」「高き山」「浜千鳥（子和讃）」「箱根山」がある。

「かさんぼこ」自体は蛇の目傘の縁に幅3尺ほどの緋縮緬の幕を巡らせ、傘の柄上部に掛け提灯（行灯）を取り付けたものである。

【事例4】西浦の念仏踊（お施餓鬼踊）

静岡県浜松市水窪町西浦の盆行事には、8月1日の道刈りと精霊棚作り、8日の「施餓鬼」、13日から14日の墓参り、15日の「ソウリョウマ（精霊馬）」作りと夜の「世の中踊り」、16日の送り盆、24日のウラボン（盂蘭盆）の墓参りなどがある⁽⁸⁾。

8月8日の「施餓鬼」では、午後1時から永泉寺（曹洞宗）で寺施餓鬼を行い、その夜、西浦の上組（上村）・中組（中村）・下組（下村）が寺の境内で施餓鬼踊をした。上組は午後7時に愛宕さまの境内で大念仏を一踊りして、下組は阿弥陀堂の前の広場で六地念仏を唱えて大念仏を踊ってから、それぞれ燈籠を先頭に行列を組んで永泉寺に向かう。行列は燈籠（大傘またはのぞき）を先頭に、音唱人、双盤、笛、太鼓、提灯の順である。寺の入口の所能口で上組と下組が出会い、互いに灯籠を傾けて拝礼を行う。中組は永泉寺境内で大念仏を踊った後、酒を飲みつつ上組と下組の出会いを待ち、双方揃ったと見ると、双盤・鉦・太鼓打ち鳴らして燈籠を掲げて山門の階段上で出迎える。

燈籠は六角燈籠で、上部の吊り柄の先端には繭の作り物をつけ、下部には刻み目を入れた円筒形の紙を飾り垂らしている。燈籠の六面には「南無阿弥陀仏」の六字名号を1字ずつ貼り付ける。下組ではノゾキと呼ばれる竹の柄に燈籠を装着する。上組と中組では、引幕を周囲に垂らした大傘（唐傘）の内側に六角燈籠を吊り下げる。燈籠にはそれぞれの仏尊の火を移しており、本尊の依代と考えられている。

下組の阿弥陀燈籠が先に立ち、上組の愛宕燈籠がそれに続き、隊列を整えて山門に向う。階段下に上組と下組の燈籠が並び立ち、中組の燈籠と間で三礼の挨拶を交わす。それから境内入口の土手上に祀られている鎮守白山権現に三礼し、燈籠だけは本堂前に行って三礼して、下組・上組・中組の順に練り込みを行う。境内広場に本堂近くから下組・上組・中組と並び、その前に各組の双盤を据える。次に3基の双盤、燈籠、音唱人、笛を囲むように太鼓と提灯が輪になって囲んで踊りとなる。初踊り（一番踊り）は下組の音唱人が唱える。一踊りの所要時間は約20分で、初踊りが終わると、本堂内の天井に燈籠だけを吊り下げる。一旦休憩となり、浴衣姿の老若男女が輪になって手踊りをする。中踊り（二番踊り）では、双盤の位置が本堂側に上組、次いで中組、下組と変わり、中組の音唱人が唱える。休憩の後、各組は本堂に吊ってあった燈籠を降ろしてノゾキや大傘に吊り下げ、本堂三礼して境内に立てる。後の踊り（三番踊り、^{かき}帰しの踊り）では本堂寄りから、中組、下組、上組の順に並び、中組の音唱人が念仏を唱える。後の踊りが終わりに近づくと、上組から徐々に境内の出口に向かう。燈籠が白山権現に三礼して、上組と下組が山門階段下に並び、中組が階段上に並んで、燈籠が相対して三礼する。上組が先に立ち、下組が続き、梅島から翁川に架かる橋を渡ると、山門で見送っていた中組の音唱人が手印を結ぶ。上組と下組は国道で分かれて、それぞれ帰途につき、途中の神仏を礼拝しながら、上組は愛宕様、下組は阿弥陀堂に戻り、燈籠を堂内に納めた後、堂内に一同着座して「光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨」の四句偈と「南無阿弥陀仏」の六字名号を3回唱えて、お施餓鬼踊りはすべて終了となる。

8月14日の午後8時から、新盆踊りといって新仏精霊供養の念仏和讃を唱えて念仏踊をする。

上組は愛宕様、中組は永泉寺、下組は阿弥陀堂や大師堂で行う。この念仏踊りは三踊りあり、その間の休憩に新盆家庭からの主食の布施が行われる。踊り場には新仏の棚を設けて位牌を祀り、念仏和讃が唱和されると、遺族を始め親類縁者などが水手向けして線香を焚いて供養する。

8月16日の夜には、上組は2回、中組と下組は3回大念仏を踊って精霊を送る。大念仏の最後に「信州信濃の善光寺」の一句を加え、「日本六十余州の神々様に大念仏 南無阿陀仏 唱えはずしがあるとても 受取はずしがないように 大念仏をあげます」と唱える。次に精霊送りとなるが、新仏の精霊棚の位牌堂や新仏提灯など、飾り物すべてを親族たちが持って行列に加わる。行列の先頭は燈籠（大傘とノゾキ）で、上組と中組は翁川の河原へ、下組は下村と大栗平の合流点まで行って送る。道中では次のように唱えて奏楽する。「大彌宜小彌宜の精霊たち 今宵今夜の精霊たち 大念仏で送ります 受取りはずしのないよに 大念仏で送ります またもおいでよ盂蘭盆に（上組）」「精霊様を送るよ～ 南無阿弥陀仏 新仏を送るよ～ 南無阿弥陀仏 後に残るな精霊様 南無阿弥陀仏（下組）」送り場に到着すると、飾り物などに新盆提灯の火を移す。燈籠などすべての火を消して、（下村は燈籠の火だけをつけたまま）奏楽を止め、遺族だけを残して一同静かに寺や堂に引き返す。そこで偈（念仏）を3回唱えて、それぞれの本尊に火をお返しする。

8月15日には上組が愛宕様を祀り、夜に大念仏を2回踊る。

8月24日には下組が午後1時から阿弥陀堂で施餓鬼をする。

夜には大念仏を三踊りする。

西浦中組の大傘は、直径110cmの番傘を紅白の布を巻いた竹竿に挿し込んで、全高243cmにしたもので、竹竿の上部に横木を結びつけ、その端に六角燈籠を下げたものである。傘紙には「南無阿弥陀仏」と書かれ、傘の周囲には幅36cmの更紗を幕として下げている。この更紗の模様は薄藍地に薄茶色の花柄丸形をぎっしりと散りばめている。



写真9：
西浦中組の大傘



写真10：
西浦中組の大傘に下げる燈籠

【事例5】 向市場の念仏踊（虫送り供養）

静岡県浜松市水窪町向市場では、8月1日の「道作り」から盆行事は始まる。初盆の家ではこの日に盆棚を飾る。13日には善住寺で「施餓鬼法要」が行われ、この時に用いた施餓鬼幡を畑に挿すと虫除けになるといい、法要が終わると奪い合うように手に入れ、仏壇に一旦祀った後に秋大根や白菜の播種をした畑に挿す。14日は墓掃除で、夕方には「虫送り供養」をする。虫送り行事の双盤と太鼓の音を聞こえてくると、カド（門）でムカエダイ（迎え松明）を焚く。15日にはアソビダイ（遊び松明）を焚く。16日午前零時頃から仏壇に供えていた供物や茄子の馬、送り団子、盆花を家の近くの水窪川の河原に持ってゆく。夜が明けるとツブラマイリといって墓参りをする。午後には初盆の家に組合衆や親戚衆が集まって送り念仏を唱え、新盆燈籠や新盆飾りを水窪川に持って行く。その時、家々では門で送り松明を焚く。24日のウラボン（盂蘭盆）の時には区役と僧侶が地区内の地蔵を読経して廻る。

8月14日午後5時半、春日神社を虫送り供養の行列が出立する。区長が先頭で、五方提灯1本、ダイガサ（大傘＝笠鉢）2本、音頭出し数人、鉦（双盤）1個、笛数本、太鼓6個の順である。

ダイガサは唐傘の周囲に幕を垂らした笠鉢で、傘には「南無阿弥陀仏」と墨書されている。ウラ（梢）の先を切って枝を2段ほど残した竹に「虫送り提灯」を下げ、そこに唐傘を結びつけたものである。

行列は三界万霊塔、河内の行進様の辻、紺屋前、次郎兵衛様の辻、中学校運動場（堂跡）入り口を巡って虫送り念仏を唱える。最後に運動場に練り込み、櫓の周りを回りながら踊り打ちをする。この踊りの最中に五方提灯と大傘は善住寺に先回りする。その後、運動場で盆踊りが催される。

【事例6】 草木の念仏踊（お施餓鬼踊）

静岡県浜松市水窪町草木の盆行事は8月1日の「盆道作り」から始まり、この日にナデシコ・トチナ・オミナエシ・ソソヤキ・ススキなどの盆花を山から持ち帰る。6日朝には七夕の棚（供物は素麺）を作って七夕竹を立て、昼には永沢寺（曹洞宗）で施餓鬼法要があり、夜にお施餓鬼踊りをする。7日は七夕で、8日の早朝に七夕竹と供物の素麺を川へ送る。14日には新しい盆花を仏壇に飾り、夕方近くにムカエダイ（迎え松明）を焚く。堂庭で迎盆の念仏踊りがある。15日には茄子などで馬を作って供える。夕方、門でアソビタイ（遊松明）を焚く。16日は送り盆で、早朝にソウリョウサマ（精霊様）を川へ送る。昼にツブライリとって墓参りをして、新盆の家に集まり、「歌念仏」をする。夜には各集落のお堂に新盆提灯を持ち寄って念仏踊りを踊り、各家ではオクリダイ（送り松明）を焚く。

8月6日、草木の遠木沢・北島・下草木の3集落の人々が永沢寺に集まってお施餓鬼踊りを踊る。一番上手の遠木沢が地元の観音堂の堂庭で三番踊りを3回踊って、道中練りをしながら下り、北島の愛宕堂の堂庭に踊り込む。北島の人々は踊りながら遠木沢の人たちと合流してから一踊りして永沢寺に向かう。下草木の人たちは下草木側の寺の入口で待つ。反対の入口に遠木沢と北島の人たちが到着すると、下草木の人たちも境内に入る。先頭は草木の阿弥陀提灯で、棒振り、カネ（双盤）、音頭出し、太鼓、提灯、笛の順である。行列は境内を反時計回りに一周し、阿弥陀提灯と3集落のカネ、笛、音頭出しが中央に位置すると、その周りで和讃や大念仏の詞章に合わせて棒振りや太鼓、提灯が踊る。練り込んで踊る位置が決まると、「寺褒め和讃」を唱え、「雨乞い拍子」を2回繰り返して終了となる。阿弥陀提灯は3集落のうち唯一阿弥陀堂のある遠木沢が1本出すだけである。唐傘の周囲に布を巡らせ、傘に阿弥陀提灯を吊るし、竹を結びつけて柄を長くしたものをダイサン（大傘）と呼ぶが、これは笠鉢の一種である。この阿弥陀提灯を吊った大傘は、遠木沢に養子に来た人が代々持つことに決まっていた。それは阿弥陀様の提灯は尊すぎて持つ人がいなかったからだという。

【注記】

注1：塚本五郎「特集遠州大念仏 補遺編」『土のいろ』通巻101号・1962年。

注2：『森町史 通史編下巻』森町・1998年。

注3：『磐南の暮らしを支えた文化財』磐南文化協会・磐田市教育委員会・2007年。

注4：『豊岡村史』「資料編三考古・民俗」豊岡村・1993年。

注5：『袋井市史』「資料編民俗・文化財・年表」袋井市・1983年。

注6：吉川裕子「第二節 遠州の盆念仏」『静岡県史』資料編25民俗三・1991年。

注7：「子ども念仏」『静岡県の民俗芸能』静岡県教育委員会・1997年。

注8：『水窪町の念仏踊』静岡県磐田郡水窪町教育委員会・1997年。

注9：内山真流（1740～1821）『遠江国風土記伝』寛政11年（1799年）・明治33年（1900年）刊行本。

注10：坂本 要「三信遠大念仏の構成と所作－三河地区を中心に－」『民俗芸能研究50』民俗芸能学会・2011年。

【参考文献】

坂本 要「西浦の大念と五方－水窪大念仏と五方念仏 その1－」『東京家政学院筑波短期大学紀要第5集』1995年。

坂本 要「水窪の大念仏－水窪大念仏と五方念仏 その2－」『東京家政学院筑波短期大学紀要第6集』1996年。